



TITLE:

<批評・紹介> 和田清著「東亜史論
藪」

AUTHOR(S):

外山, 軍治

CITATION:

外山, 軍治. <批評・紹介> 和田清著「東亜史論藪」. 東洋史研究 1943,
8(3): 191-192

ISSUE DATE:

1943-08-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138861>

RIGHT:

批評・紹介

東亞史論叢

和田 清 著

昭和十七年十二月 生活社發行
A5判 五七九頁 定價 金六圓

本書刊行の意圖は、その「序に代へて」につくされてゐる。

それによると、世間に正確な根柢ある歴史的知識を普及するとともに、初學入門の手引ともなれかし、といふ氣持から、今まで發表した著者の論文の中で、輕い解り易いものだけを蒐めたものである、といふ。そして著者は、現下の急需に應じては、私が多年研究して得た學術論文集よりもこの通俗論叢の方がより多く御役に立つであらう、といつてゐられるが、いかにもさうだと思ふ。滿鮮地理歴史研究報告その他に發表せられた著者の精緻をきはめた力篇は、これに没入して熟讀するならば、達意の文章にひきこまれて自ら興味津々たるを覺えるのであるが、まづその尨大さに壓倒せられて通讀の勇氣を失ふ人が多いのである。況や専門以外の人々に於てをやである。一體從來の東洋史の論文にはむづかしい漢文の引用文が多く、漢文を引いては、「とありて」といつて次の叙述にうつる。「とありて」の連續で、何とあるのかさっぱり判らない、といふ苦情を聞くこと一再でない。この論叢は、その「とありて」句調の論文に僻

易する人々にも親しみ易いであらう。

全篇二十四は、支那篇十、日本篇二、滿蒙篇六、民族篇三、書史篇三に分けられてゐる。題目だけをみて、北は滿蒙シベリヤから南はフィリッピン諸島に及んでゐるが、更にその内容を見ると、論述の範圍はひろく大東亞の諸地域を含み、しかも日本が東亞に於て如何なる地位を占めて來たか、そして現に占めてゐるかといふことはつきりつかんでゐて、眞に東亞史論叢の名に背かない。

かうして同種のものがまとめられてゐるのを通じて讀むと、その一つ／＼をその時々讀むよりも一層、著者の考へがはつきりと判る。たとへば、漢民族漢文化の最盛期が隋唐に極まつて、それから後は漸落の時であるといふ考へがややよりであつて、漢民族漢文化の發展は、大體に於て一代毎に進んだものである、といふすべての基礎となる著者の透徹した考へ方の如き實にはつきりとその眞意を知ることができるのである。しからば隋唐の文化がさやうにもてはやされ、明代がつまらない時代に見える、その理由はどこにあるか、又、著者は何をもつて明清の國勢が隋唐を凌いだとするのか、これに關する例證は「支那史序説」、「明代概説」、「清代概説」、「支那文明の特質」に詳しく述べられてゐる。これらの諸篇はやはり本書中の重要な部分であつて、「東洋史上より見たる日本」、「滿蒙史の大勢」、「東亞民族發展史序説」などとともに、平明なうちに多くの示唆を含む好讀物であると思ふ。その他「李鴻章とその時代」が、短

篇ながら、李鴻章といふ幅のひろい大人物を縦横に描いて著者の眼界のひろさをあらはし、「我が國に於ける滿蒙史研究の發達」が、内藤湖南博士の「昔の滿洲研究」よりも取扱つた時代もながく、またこれとちがつた味ひをもつてゐて、興味ぶかく讀まれた。一々の紹介はせず、わが東洋史界有數の名著として切に一讀をお奨めする。たゞ著者も心配してゐられる通り、一般の人にもつては特殊すぎて讀みづらいものが四五篇ある。私はむしろそれらを割愛し、讀み易いものだけをもつとゆつくり組んで出して頂きたかつたと思ふ。

〔外山軍治〕